平成 31 年 1 月号　№507

なかま

発　　行
佐倉市立中央公民館
編　　集
なかま編集委員会
〒285-0025
佐倉市鏑木町 198-3
電話（043）485-1801

なかま作り---------- 矢口　孝
なぜ、佐倉に？---------- 原田　桂子
米作り体験記---------- 吉崎　隆
ナウマン象---------- 若佐　秀雄

…《新春に寄せて》…

佐倉市長　蕨　和雄

『なかま』をご愛読の皆様、新春を寿ぎ謹んでお慶びを申し上げます。市民の皆様におかれましては、新年を迎え、希望に満ちた穏やかな新春をお過ごしのことと存じます。

また、市政の運営にあたっては、日ごろから格段のご協力をいただいておりますことに心より感謝申し上げます。

この『なかま』は、市民カレッジの皆様を中心とした方々が作成しており、貴重な情報資料であると感じております。

「佐倉市民カレッジ」は、市民の皆様が生涯にわたってふるさと佐倉で学び続けられるよう環境整備を進めている中にあって、非常に大きな役割を担っています。

私も、ときどき市民カレッジの学習の様子を拝見しておりますが、拝見するたびにその学習意欲に驚かされております。

そして、4年間、仲間とともに楽しく学ばれた後、卒業後は、地域においてまちづくりや健康づくりなどで活躍され、多大な貢献をいただいていることに感謝いたしております。

さて、本年はいよいよ東京オリンピック・パラリンピックの開催を1年後に控え、全国的にさまざまな動きが加速していくと思っております。

佐倉市にとりましても、第4次佐倉市総合計画後期基本計画の最終年度に入ることから、計画の総仕上げに向けてラストスパートに入ります。

我が国は、人口減少、少子高齢化という急激な人口構造の変化をはじめ、多くの課題に直面しており、課題解決に向けた地方自治体の取組みの重要性が増してきております。

本市には、明治初期に我が国の近代化を成し遂げた、あまたの先覚者を輩出してきた歴史と、それらの人々を育んできた自然や文化が脈々と受け継がれております。

私たちもその英知を結集することによって、新たな社会を創造し、未来を構築していくことができるものと信じております。

さて、平成31年の干支は「亥」でございます。本年もここに干支の文字を書かせていただきました。皆様方にとりまして平和で幸多い年となりますよう、心からご祈念申し上げまして、年頭のご挨拶といたします。

なかま作り

小学校教員を定年退官した私に残されたのは、20年以上住んでいても、声をかけたり、かけられたりする人が一人もいない現在の地元だった。そんな私が初めに選んだのは、調理師専門学校。2年かけて、調理師と製菓衛生師の免許を取って卒業。それでも、地元での存在は、2年前と変わらなかった。次に選んだのは、志津公民館主催の「おやじの食事学」。月2回ではあるが、生徒全員が佐倉市在住。すぐに周囲と溶け合い、仲間の輪ができた。まるで現在の市民カレッジのように。

「おやじの食事学」在籍中に、調理師免許を持っている事がバレ、年2コマではあるが、食事学の講師をするようになった。4年前には、食事学同期生で作る「楽習会」から講師依頼を受け、今も続いている。楽習会は正会員15名の適正規模のグループだ。人から、「楽習会」について聞かれる事がある。私の答えはいつも同じで、「楽習会で会社を作ったら、良い会社になる」。一人一人が個性豊かで、協調性があり、やる気満々なのだ。4年間私が教えてきたのは、基本的に薬膳料理。皆、同じ位の歳なので、体に良い料理を楽しみながら作ってもらいたいからだ。

皆さんの中で、料理に多少なりとも興味関心があって、仲間作りを考えている人に「おやじの食事学」はおすすめだ。活動日が土曜日なので、カレッジとの二股も可能だ。活動の様子を知りたい人には、楽習会の見学や実習体験をおすすめする（詳しい事は、市民カレッジ1年2組の矢口までどうぞ）。

（井野　矢口　孝）

米作り体験記

佐倉の谷津は素晴らしいと言いつつ自転車で通り過ぎてしまっている。そんな時小竹地区で「米つくり体験場」を実践している山崎さんに声を掛けられた。社会福祉協議会等に協力してすでに10年になると言う。

4月の種まき、5月の代掻き、田植え、6月の草取り、9月の稲刈りと収穫祭、脱穀が半年の作業工程となる。鎌で刈り無農薬の天日干しで美味くないはずがない。

小竹小学校の40人余りが参加して私も交じって初体験。天候と田圃の管理、人々との交流は全て山崎さんの「専門力」による。コシヒカリの種籾を湯で消毒して、浸種、催芽を経て育苗箱に種まきをする。温湿度管理しながら出芽を待ち乾燥の具合を見て散水をする。良い苗ができれば米作りは半分成功と言えるらしい。発芽から1ヶ月位で3枚の葉が出た頃に代掻きを終えて田植えだ。施肥、水や病気、雑草の管理が肝で、肥料の量によって収穫時の倒れ方を見極める。児童が鎌で切りやすい立ち具合を想定するのだ。機械の収穫は稲穂が重くて倒れてもできる。水の管理も絶妙で、成長してきたら、しっかり根付かせるために水を止めて田圃にひび割れを作って根切りをし、下に根を張る様に促す。天日干しは地元の竹にオダ掛けする。

児童が数えたら稲穂1本に150粒。稲1株が約30本でお米約4千5百粒。お茶碗約2千粒とすれば稲1株でお茶碗2杯と少しになる。全体で4俵（240㌔）の収穫だ。

はしゃぐ子らと稲刈りの時、稲の青臭い匂いに顔を起こすと曼珠沙華の群生。谷津にさわやかな恵みの風が横切り、拭う汗に青空が嬉しい。

（城内町　吉崎　隆）

なぜ、佐倉に？

何の縁もゆかりもないはずの佐倉に転居し12年目の秋。東京の社宅で家族同様だった友人の一家が移り住み、子供たちだけが国際花火大会を見物に佐倉に来ていた。社宅から退去することになり、転居先を探していると友人に話した途端、連日、佐倉の物件をＦＡＸで送信してきた。流石に、友人の好意を無視できず観光を兼ねて物件を見て歩いた。しかし、条件に合う物件に出合えず、佐倉駅前の不動産屋で見つけた物件への移転が決まった。10月に見つけ、11月に入居のスピードだ。友人一家が居るだけの縁のはずだった。知人が増える度に必ず聞かれたのは、「なぜ、佐倉に？　」。

友人一家が居るだけではカツコがつかない。30年間住み慣れた東京を離れる明確な答えが必要だった。同居中の子供２人は東京が勤務先だ。佐倉の歴史を調べた。私の旧姓は千葉。父の故郷は岩手県一関市。鎌倉時代に千葉常胤の命を受けて東北支配を任された千葉一族の末裔だった。生前、父は千葉がルーツと語っていたが、まさに、佐倉がその地だったのだ。千葉一族終焉の地、本佐倉城。海隣寺、勝胤寺には千葉一族代々の墓が祀られている。

私は一関市で生まれ、大船渡市盛（さかり）町で育った。私は父がなぜ盛町を永住の地に選んだか謎だった。盛の語源を調べた所、答えが出た。盛の古代名佐倉里（さくらり）から読みが変化した言葉なのだ。想えば、佐倉里公園をはじめ、佐倉里の店名も多い。周りは千葉姓だらけだ。一関、大船渡、そして佐倉。父親と同様に、移り住む因縁があったのだ。今、「なぜ、佐倉に？　」と問われれば、私は明確に答える。父祖伝来の故郷だからだと。

（宮内　原田　桂子）

ナウマン象

野尻湖の湖底発掘で有名なナウマン象は、日本でゾウの化石をはじめて研究したナウマン博士にちなんで命名されたものです。そのエドモンド・ナウマンは、明治八年（一八七五年）に東京帝国大学地質学教室の初代教授としてドイツから来日したお雇い外国人です。多くの日本人地質家を養成し日本の地質学の基礎を育てました。今から百四十年以上も前のことです。

時の明治政府は、富国強兵政策で強力な近代国家を作るため、多くのお雇い外国人を欧米各国から招きました。当時の世界の最先端技術や制度を広い分野にわたって吸収するための国家戦略でした。これが今日の日本の科学技術の礎となっていることに疑いの余地はないでしょう。お雇い外国人から直接教育を受けた明治時代の若者達は、学識と技術とその見識を余すところなく吸収し、以降の日本の科学技術の発展につなげて来ました。その後、世代交代を続けながら多くの日本人技術者たちが百年の時を経て努力と創意工夫で発展させ、日本を技術立国させたことを私は大いに誇りに思います。

今後は、私達が次の世代に技術を伝承して行く番ですが、果たしてナウマン博士以来の情熱と技術を次世代に伝承できるかどうかに大変疑問を感じています。昨今の問題として日本の技術は今や諸外国に後れを取っているようで心配です。半導体、鉄鋼、造船、繊維などのように、産業として一時期の勢いがなくなったのは、百年に一度と言われる不況風に加えて、国全体で技術の研鑽や革新と伝承が疎かになっているためではないかと私は危惧しています。

（南ユーカリが丘　若佐　秀雄）

１月の黒板

『なかま』の原稿を募集しています！

『なかま』の２ページと３ページは佐倉市民の皆さんから投稿いただいた記事を掲載しております。

『なかま』の原稿は、自由テーマを原則としています。**「趣味」、「旅の思い出」、「祭り」、「私のふるさと」、「私の健康法」**など何でも構いません。また、日常での出来事で発見したこと、気付いたこと、経験や感想などもご随意にお書きください。

原稿の字数は、650 字（13 字×50 行）以内です。また、掲載するにあたり常用漢字への変更や、句読点等修正させていただくことがあります。

問い合わせ先
佐倉市立中央公民館　TEL: 043-485-1801　FAX: 043-485-1803
〒285-0025 佐倉市鏑木町 198-3
E-mail: chuo-public@city.sakura.lg.jp
URL:http://www.city.sakura.lg.jp/soshiki/16-1-0-0-0_1.html

『なかま』は佐倉市民カレッジの学生と卒業生で構成される編集委員が編集し、市民カレッジ情報コースの卒業生が文字入力を行っています。

さくら道

２学年の「まちづくり」が終わり、引き続きボランティアとして竹垣の修復に参加している。すでにひよどり坂、旧平井家住宅、志津コミュニティーセンターは終了した。最初の頃は、竹垣の結び方がなかなか覚えられず苦労したが、数をこなすうちにコツを覚え上手になってきた。完成した時の達成感は言うまでもない。

竹の伐採は、寒くなり竹の成長が止まるこの時期が適しているとのこと。今回の修復場所は佐倉城址公園である。３月中の終了を目指し頑張っている。とにかく一番寒い時期なので、体調に合わせ無理せず、仲間と共に楽しみたい。きれいになった竹垣のもと、花見ができたら最高である。

（田村　千鶴子）

あとがき

平成最後のお正月を迎えました。年の始めは誰しも、この１年が良い年であって欲しいと願うことでしょう。

きっといろんな事があるでしょうが、一番はなんと言っても５月に改元（元号が変わる）されることではないでしょうか。１ヶ月前に発表されるとの話もありますが、どんな元号になるのでしょう。明治、大正、昭和、平成と同じく漢字２文字で表わされると聞いたような気がしますが、全く想像出来ません。

昭和20年代に生まれ、平成の今日まで生きて来ましたが、世の中の移り変わりは大変なものでした。来たる新元号の時代は、人工知能等の更なる進歩により、想像もできない世の中になるのでしょう。

新時代を何年生きるか分かりませんが、出来るだけ多くの事を見たいものです。

（坂田　和孝）